またふたたびの道

李 恢成

講談社文庫

講談社文庫

またふたたびの道

李 恢成

昭和47年12月15日第1刷発行
昭和49年4月20日第4刷発行

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京　3930

デザイン　亀倉雄策

製　版　株式会社まゆら美研

印　刷　豊国オフセット株式会社

製　本　有限会社中沢製本

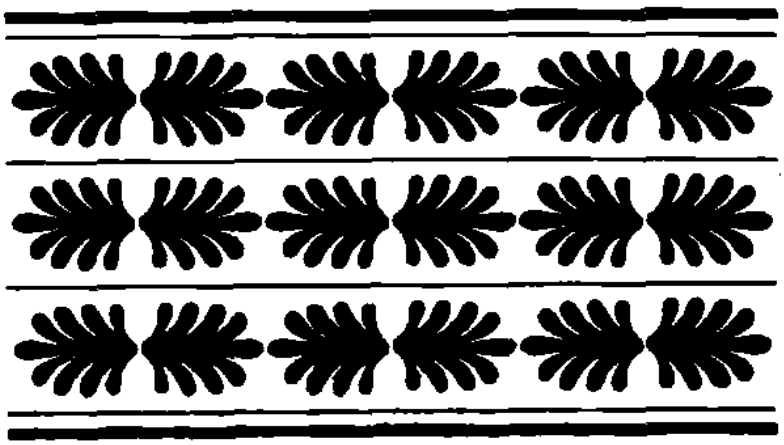
© I Fue Song 1972
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

講談社文庫

またふたたびの道

李 恢成



講談社

目次

またふたたびの道　五
解説　平岡篤頼　一六六
年譜　一七六

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

またふたたびの道

一章

一

哲午（チョルオ）がその話を聞いたのはじっとりと暑い夏の夜のことだった。

いつものように九時過ぎてアパートのわが家に帰ると、哲午はおそい晩めしをとった。その日は祖国情勢をめぐって金北鳴（キムブクミョン）といつ果てるともない議論を闘かわせ、尚のこと疲れていた。食事をすませると、やっとほっとした。後引きのする奨学会の仕事や精悍な金北鳴の顔を忘れた。

妻の安熙（アンヒ）が淹れてくれたお茶をすすり、哲午はゆっくりと首の運動をした。さすがに家にもどると、安息を覚える。

そのとき、妻の安熙が、

「チョルオさん――」と、話しかけてきた。暑がり屋の妻は小鼻に汗の玉を滲ませていた。

「手紙がきたのよ。北海道の義兄（にい）さんから」

「ほお」

掌にくるむようにお茶を持ったまま哲午は軽い歎声をあげた。

「どっちの兄貴だろう?」
二人の兄がいた。さらに二人の妹がいる。
「炳午義兄さんよ」
二番めの兄であった。ことしで三十四歳のこの兄は三つ離れた哲午を何かと気づかってくれている。
「見せてごらん」
哲午はかたわらの卓袱台に茶碗を置いた。安熙は手タオルでひょいと顔の汗を拭い、それを卓袱台にのせると肥った躰を起こした。そのはずみで安熙はあっと低く声を洩らし、口元に手を当てた。ふっくりした顔が渋柿を齧ったように変った。
哲午は足の臑を掻きながら、いそいで妻がトイレに入っていくのを見やった。やがてケッケッと吐く音が壁越しにかすかに聴えてきた。
トイレから出てくると、
「ああ」と安熙が生き返ったような声をあげた。
「夏っていやね。たまらないわ」
目尻に涙が光っている。肥満体質の妻は夏が鬼門であったが、折悪く悪阻がはじまっていた。
「扇風機の風がいけないんじゃないか」
無造作に哲午は扇風機のスイッチを切った。音が途絶えると夏虫の声がわいてきた。
「でも暑くって。雨戸を開けると蛾や蚊が舞いこんでくるし。この辺は植込みが多いし郊外だか

らとくにそうなのね」
そうぼやきながら妻は三畳間に入っていった。すぐ出てきた安熙の手に一通の部厚い封筒が映った。
「それで、病院には行ってみたのかい？」
妻が手紙を手渡して、かたわらに横坐りに坐ったとき哲午が訊ねた。
「うん」
おくれ髪を掻きあげながら安熙は頷いた。
「別に心配することないのよ。はじめての中絶だったし、その程度のことはこんどの悪阻がひどいのと関係ないんですって。ことしはとくに暑いでしょう。そのせいなんだわ」
ことしの正月早々、安熙は中絶した。五ヵ月だった。やむを得ぬ事情でそうなった。だがその際の中絶の影響で悪阻がひどいのではないかと夫は疑っているのであった。
「それなら、いいけど……」
哲午はなにか歯に物のはさまった言い方をした。
気をそらすように安熙は話しかけた。
「その手紙、さきに読まして貰ったわ。義兄さんが二人の名前で送ってくれたの」
「何だろう？」
哲午は呟いた。これまで別々に手紙を送ってきたことはあるが、二人宛で書いてきたためしはない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「で、どんなこと言ってた？」
かすかに顔を曇らせ、哲午は封筒の中身を引出した。
安熙はちょっとためらいを覚えた。返事がないので哲午は訝かしそうに妻を眺めた。妻が自分を不安と期待の入り混ったまなざしで瞶めていた。
「オモニ（姑さん）のことを書いているの」
「オモニのこと――？」
とっさに哲午は義母の小柄な姿を想い浮べた。
「そうよ。帰国するんだって」
「帰国――」
鸚鵡がえしに鋭く呟き、哲午は眉をしかめた。
安熙はまじろがずに頷いた。自分の表情に見入っているまなざしを哲午は感じた。何かを信じさせたいと願っているようにも映る。
「そうか」
一呼吸してから哲午は感情を抑制するように言った。
「で、いつ帰るんだって？」
「まだ日取りは決っていないらしいの。でも近々の模様よ」
「ふーむ」
哲午は呟き、また首を左右に屈伸させた。できれば今しがた聞いた話を払い落したいと願って

いるように。
安熙は丸首シャツにステテコ姿で憮然として坐っている夫の様子を不安げに眺めていた。
「手紙よまないの？」
半開きの中身は夫の手に握られたままだった。
「うん」
放心したように洩らし、夫は却って手紙を卓袱台の上にポイと置いた。
「疲れた。あとで読もう」
哲午は妻のまなざしを避け、部屋の隅でねむっている子供を眺めた。
「民（ミン）に毛布かけてやれよ」
三つになる子供は両手をひろげ、口を開けてねている。
安熙は躰をずらし、民がけとばした毛布を腹の辺まで掛けてやった。おでこや日焼けした腕にびっしょり汗を吹いている。そっと手で拭ってやりながら、
「智慧がついてきちゃって。このごろは何だかんだってうるさいのよ。今日だって保育園に遅れて迎えに行ったら、耳に口を寄せて、もっと早く来てって言うの。ぼくいつもびりっ等でさびしいんだ――なんて。やはり物心がつきはじめたせいか、言うこともだんだん子供らしくなってくるのね。なんだか可哀相な気がしちゃったわ」
「仕方ないだろう」
妻が手紙のことにそれ以上触れぬのを救われる思いで哲午は答えていた。安熙はまだ大学院の

学生であった。化学を専攻していた。それで昼間は保育園に子供をあずけていたが、夕方は五時過ぎでないと保育園に寄ることができなかった。

「遊んでいるんじゃないんだし。子供だってきびしく育てなくちゃ。もっとも、きみも十年勉強南無阿弥陀仏じゃ困るけど」

安熙は狐につままれたような顔をした。

「なに、それ。南無阿弥……」

哲午はふっと苦笑した。

「金北鳴って知っているだろう。いや、知らなくったっていいけど、そいつが言っていたのさ。政治的にはまるっきり油と水なんだけれど、在日同胞女性はもっと学問すべきだということじゃ奇妙に意見が合ってね。やつはT大できみが学んでいるのは大いに結構なことだと言うんだ。ただ女ってのはえてして名前だけの勉強をしてお陀仏しちゃうから、そこらが問題だとね。どうやらかれ一流の皮肉で朝鮮の諺を用いたんだけれど、価値のある学問をすべきだということなんだろう」

「こわいわね」

安熙はそのときばかりは胸の辺りが冷たくなるような気がした。子供を育てながら学ぶハンディを日ごろ感じていた。しかし二人めを宿した矢先にそのような言葉を聞くと自分が責められているように思うのである。子供は二人きりと決めていた。その二人のわが子を育てながら、研究をやりぬこうとひそかに臍(ほぞ)を固めてはいるのだが。

「まあ、じりじりとやることだよ。見せかけの勉強はする必要はないが」
夫は呟くように言った。
「そうよね」
安熙は項まで切り上げたうしろ髪に手をやりながら頷いた。
仕事場から持ってきた原稿の整理を哲午は思い立った。季刊の会報にのせる奨学生の原稿であった。
座を立とうとすると、
「ねえ、チョルオさん――」
と安熙が翳りのある表情で話しかけてきた。
「何だよ」
妻は自分の前を気にするのか、膝に手をあてた。真面目な話になるときの癖だった。
「わたし、義兄さんの手紙をよんで、いろいろと感じさせられたんだけど」
やはり、手紙のことに蟠まっているのであった。
「手紙か……。あとで読む。いまはどうも、読む気になれないんだ」
にべもなく言われて、安熙は接穂のない困惑を覚えた。さっき、問われるままに姑が帰国する由を告げたのがいけなかったように思う。そのときから夫は手紙をよむ気をなくしているのだった。
安熙はこわばって見える夫の顔立ちを瞶めた。つとめて夫は平静を装って見返している。姑の

件で話すときに現われる壁が二人の間に立ちふさがってくるのだった。そんなときの夫は日ごろ、物事の判断にかなり突っこんだ理解をしめす夫とは別人のように映る。安熙は姑の件で夫がとっている態度に疑問を抱いていた。義母をにくむ気持もわからぬではないが、私情に溺れているように思う。剝き出しの愛情はひょっとした折に子供っぽい訴求心を感じさせたが、どこかおおらかさに欠けているのであった。

「ではこの手紙、あなたの机の上に置いておくわね。義兄さん、返事がほしいんじゃないかしら。わたしはちょっと考えさせられちゃった。小ちゃなことかも知れないけど、この子を見ているとそんな気がしてくるわ」

安熙はぐっすり眠っている民の前髪をなぜながら言った。

「どんなことだろう?」

夫は意地悪い声で突っこんできた。

「いつか、この子がボクにおばあさんいないのって聞いたことあったわね。隣の子の家に田舎からよくおばあさんが訪ねてくるのを見ていて自然とうらやましくなったのよ。そのとき私達は祖母ちゃんは死んでいないと答えた。ミンはその言葉をしんから信じちゃってる。祖母ちゃんってかわいそうにって。生きていればいいのにって——。でも祖母は生きているじゃない。私達は子供に嘘を言っているのよ。それはまだほんの子供だから難かしいことはわからないけど、でも死んだと言ったのはやはり気になってならないの。それって、オモニの痕跡を趙家から消そうとする大人の押しつけのように思うの」

安熙は夫の表情がかすかにゆがむのがわかった。

「……仕方がない。どう言えばいいと言うのだ。いつかはわかってくれるさ」

押し出すように言い、哲午は憮然とした面持ちで立ち上った。起き上って三畳間に引っこむ夫の後姿を安熙は満されぬ思いで眺めていた。

襖を閉め、そのまま立ちつくして哲午は爪を噛んでいた。それから思い直したように机に向い椅子を引いた。学生の原稿を机の上にのせ、そのひとつを読みはじめる。

妻が流しで食事の後片付けをしている音が聴える。蟬の啼く声が閉めきった窓の外からひっきりなしに聴える。蚊を叩いて落した。

どうも落着けなかった。哲午は椅子を引き直し、原稿を瞶めた。だがやはり精神を集中することができなかった。

仕方なく、哲午はタバコを吸った。何気なく目を閉じたとき、義母のけうといまなざしが浮んだ。〈そうか。帰国するのか……〉

心のなかで呟いていた。そのときから哲午の脳裡に海が拡がってきた。おぼろな海であった。その海のかなたに幻の島がかすんでいた。タタール海峡に沿って、蟹のはさみのように伸びている樺太。その海と島がいま哲午の心にかぎりなく近づいてきていた。

その憶い出のなかから、一人の少年が抜け出していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com